

ゴーゴリ「ディカーニカ近郷夜話」の神話論的分析 —ゴーゴリのウクライナ性と ウクライナをめぐるロシアのディスクール

大野 斉子

はじめに

19 世紀末におけるゴーゴリ作品の受容と古典化

19 世紀末から 20 世紀初頭は、ロシアの国民文学が大規模に編成された時期である。それまでに生み出された文学作品の中から、ロシア文学を代表するにふさわしい作品を文学者や出版社が協力して選び出し、文学全集の出版が行われた。その代表例がイラスト週刊誌「ニーヴァ」の付録として刊行されたロシア文学シリーズである。

ロシアの作家の全集を出版すること自体は、それ以前から行われていたが、この時期の特徴はむしろ読者の方にあった。1870 年代から 1880 年代にかけて新たに登場した「ニーヴァ」のような雑誌は、従来とは比べものにならないほど広範な読者層を開拓した。知識人、都市住民だけでなく、子供や地方の住民、高い教育を受けていない人々を読者として取り込み、こうした新たな読者グループに向けて出版を行ったのである。軽い内容をもつ雑誌は彼らにニュースや娯楽を届ける媒体であるばかりでなく、文学全集のような、無料の付録としては過剰なまでに充実した文化資産を乗せて、ペテルブルグからサハリン島までを網羅する広大なネットワークを築いた。

このような力のあるメディアの出版活動は、とりもなおさず情報を共有する新たな共同体の構築につながっていた。「ニーヴァ」はこうした変化をもたらしたメディアとして革新的な存在であったが、読者開拓をめぐるこの変化は 1861 年の農奴解放後の教育の拡大や、啓蒙活動の高まり、ドイツなどの外国出身の出版者達の登場などによって必然的にもたらされた動きであった。

拡大し、再編される読者集団に積極的に提供された文化資産は、まずは文学であった。娯楽性の高さ、テキストという媒体形式など文学作品に備わる属性と出版物との親和性の高さもさることながら、社会の中で持続的な高まりをみせていた様々な啓蒙活動、例えば、学校教育や移動展覧派の絵画展などにおいて、文学は民衆に提供されるべき重要なコンテ

ンツの一つとなっていた。ここには文学の、共同体の形成に直接関与しうる物語としての機能が働いていた。19世紀末における出版社や学者たちによる文学全集の出版による古典文学の選定は、歴史を遡及的に整理し直し、読者集団の共同体の意識の形成を進める重要なプロセスであった。¹

古典とは、一般的には、優れた出来映えの歴史上の文学作品全般をさすが、この時期に編纂された古典はそれよりは限定的な内容であった。例えば、「ニーヴェ」の文学全集を飾った作家たちは、18世紀の作家たちも含まれているが、プーシキン、ゴーゴリ、ドストエフスキイ、レスコフなど19世紀の作家が多く、ロシアが近代化をめざして以降、ほぼ同時代までを対象としている。ここには、読者が読んだときに理解可能かどうかという言語上の問題も大いに関係していると考えられるが、それ以上に「我ら」の領域が近代以降に限定されているということが重要である。なぜ近代以降なのか。それは、19世紀末の「我ら」のアイデンティティの構築が、近代以降の世界におけるロシアの位置づけをめぐる問いと不可分だからである。

ナショナリティの構築とゴーゴリ

19世紀のロシア文学のテーマの一つは、ロシアとは、ロシア人とは何かという問いの探求であった。プーシキンを始め、ロマン主義時代にはロシアの歴史を記述することへの関心が高まり、リアリズムの初期においては、ベリンスキイがロシアの国民性の定義の困難とその探求の必要性を説いた。ドストエフスキイやトルストイの作品においてもロシア性への問いは作品群を貫く大きなテーマとして存在しつづけた。ナショナリティの確立は、19世紀の文学に課せられた大いなる使命だったのである。

19世紀末から20世紀初頭におけるロシア文学の古典化のプロセスは、ナショナリティの問題と不可分であった。この中で選定された作家は、学者や出版社がいわば上から読者たちに指し示したのであったが、一方で新たな読者たちは自分たちの側から作家を選び出しもした。読者が文学作品にふれるのは「ニーヴェ」の付録や教科書や、立派な全集ばかりではない。ニコラ市場とよばれる、海賊版を含む本の市場で、二束三文で売られる俗悪な冊子や、農村を回るルポーク（一枚版画）売りが持つてくる、小説を元にしたルポークなど、彼らは文学と多様なパイプでつながっていたのである。こうした中で、民衆の読者の人気が集出したのが、プーシキンとゴーゴリであった。

19世紀末から小さな出版社を始め、のちにスイチン社という大きな出版社に成長させ

¹ 大野斉子「マルクス出版社の『ゴーゴリ著作集』」『SLAVISTIKA XVIII』東京大学大学院人文社会系研究科スラヴ語スラヴ文学研究室紀要、2003年、27-52頁。

たイワン・スイチンは、回想録の中でこう述べている。

プーシキンとゴゴリの作品が、民衆の間で瞬く間に 20 万部も売れたのは、明らかに、この二人の作品がロシアの民衆にとって親しみやすく、分かりやすかったためである。²

19 世紀後半の啓蒙活動の中で、民衆の啓蒙のために書かれたいくつもの教育的な文学作品は、民衆には見向きもされずに消えていった。読者の間の人気は出版社や作家の力でコントロールできるものではない。人気は、ゴゴリの作品が当時の読者たちの意識や想像力と響き合ったことの結果である。

では、ゴゴリ作品のうち、特に人気が高かった作品は何だろうか。スイチンは、回想の中で、ゴゴリ作品を民衆向けの海賊版の形で出版したことを書いている。こうした海賊版は大抵、オリジナルに大きく改変を施したテキストを粗悪な装丁で出版したものであったが、正規の出版物に比べ大変安価なため、民衆の間で愛好され、大部数を売り上げ、広く読まれた発行形態であった。スイチンは、ゴゴリの海賊版の中で、特に人気が高かった作品としてウクライナを題材にした作品を上げている。例えば短編「恐ろしき復讐」をアレンジした海賊版「恐怖の魔法使い」や、中編「ヴィイ」の海賊版「墓場での三夜」である。³

このように、ゴゴリ作品は 19 世紀末の受容の現場において、読者の拡大とともに「我ら」の物語としての位置づけを獲得し、ロシアの古典として確立されていった。このことは、ゴゴリ作品が、新たな読者共同体の構築やナショナリティの探求にふれるテーマを多分に持っていたことを指し示している。しかしその中でもウクライナを題材にした作品がことのほか好まれ、盛んに読まれたのは一体どういうことなのだろうか。

ゴゴリ作品の、ナショナリティの探求に関わる要素とは一体どのようなものなのか。そして、ウクライナという題材はそれといかなる関係を結ぶのか。これが本稿の出発点となる問いである。

これを考察するため本稿では、広い読者層にとりわけ人気が高かったゴゴリの初期作品、「ディカーニカ近郷夜話」を分析の対象とする。

第一章では、ウクライナ出身であったゴゴリのナショナリティを、ウクライナとロシアの関係を巡る歴史、文学的なコンテクストに置き直して考察する。第二章では「ディカーニカ近郷夜話」を神話としてとらえ、テーマと形式の両面から分析する。これをふまえて第三章では「ディカーニカ近郷夜話」のディスクールの特徴について考察を行う。

² Сытин И.Д. Жизнь для книги. М., 1960. С. 54.

³ Там же, С. 52.

1. ウクライナ人作家としてのゴーゴリ

1-1. ゴーゴリのウクライナ性

ゴーゴリ作品におけるウクライナの表象とナショナリティの問題は、ゴーゴリ自身がウクライナ出身であるという事実と不可分である。しかし、ロシア文学の作家としてのゴーゴリを論じる際、ゴーゴリがウクライナ出身であるという伝記的な事実は、作品研究においてテーマとなることもあれば、問題とされない場合もある。

ゴーゴリの出身を問題としない場合は、使用言語がロシア語であるということが主な理由である。ゴーゴリはウクライナ語ではなくロシア語で作品を書いたのであるから、テキスト分析においては、ロシア語の作家として扱うという立場である。

また、当時のウクライナはロシア帝国の属領であり、一地方という位置づけであった。そのため、作家自身を取り立てて自身のウクライナ性を創作の糧として自認しておらず、むしろロシアの作家として、ロシアに奉仕するという意識を強く持っていたことも重要な論拠の一つである。ゴーゴリの作家活動の中で、ウクライナ人であるという自意識は創作とそれほど強い結びつきを見せないのである。

しかし、ゴーゴリの書簡や作品にはゴーゴリと故郷ウクライナとのつながりが随所に見て取れるのも事実である。ゴーゴリにとってのウクライナとはどのような存在だったのか。そして、ゴーゴリはロシアとウクライナの関係において自らをどのような存在と認識していたのだろうか。

以下では、同時代のウクライナの知識人たちの認識について考察する手がかりとしてウクライナの民族運動を取り上げ、ゴーゴリが同時代のウクライナの知識人としてどのような位置づけにあったのかをロシアとウクライナの関係史をふまえて考察する。

1-2. ウクライナとロシアの関係史

1-2-1. 18世紀までのウクライナとロシア

まずウクライナとロシアの関係の歴史を概観する。ウクライナは歴史的にロシアと深いつながりを持ち、政治的・文化的な両者の関係は多様で複雑である。

ウクライナとロシアはともに東スラブと呼ばれる地域に属する。この地域に初めて成立した国家は、現在のウクライナの首都、キエフを中心とするキエフ・ルーシであった。その後、タタールのくびきと通称される、約200年にわたってモンゴルの支配下にあった時期を経て、ルーシの中心は14世紀ごろにモスクワ大公国に移る。この時期まで、ロシア

とウクライナは言語が未分化であり、文化的にも分かちがたい関係にあった。

モスクワ・ルーシの成立以後、ロシアとウクライナの分化はすすみ、16世紀にウクライナはポーランドの植民地となる。1648年、ウクライナのコサックはポーランドに対する反乱を起こし、1654年にロシアとペレヤスラフ協定を結んで、ロシアを宗主国とした。しかし、18世紀初頭、ウクライナ・コサックのヘトマン（頭領）マゼッパは、スウェーデンのカール二世と提携し、ウクライナ・コサックの独立を目指してロシアからの独立をはかった。この戦いは1709年のポルタヴァの戦いで敗北というかたちで幕を閉じた。これ以後、独立をかけた戦争は行われず、ウクライナの民族運動は文化活動の形をとることとなる。⁴

1-2-2. ウクライナのロシアに対する民族運動の系譜

近代までのロシアとウクライナの関係はこのような歴史をたどった。ではウクライナのロシアに対する民族運動は、どのような形で行われたのだろうか。

中井は、「ウクライナ・ナショナリズム」の中で、ウクライナの民族運動に備わる特徴を以下のように整理する。

1. 政治的闘争か、文化的運動か。
2. 分離志向か、合流志向か。

政治闘争は、戦争を含む実力闘争である。それに対して、文化運動は、出版、教育、言語、文学芸術などの領域における、実行使を伴わない静かな運動である。また、分離志向とは、ロシアから独立しようとする動きであり、合流志向とは、ロシアに合流し、その中に入っていこうという動きである。⁵ これらの要素の組み合わせから民族運動は4つの類型に分類できる。すなわち、政治的闘争＋分離志向、政治的闘争＋合流志向、文化的運動＋分離志向、文化的運動＋合流志向である。

18世紀の独立戦争の敗北以後、19世紀のウクライナの民族運動は文化運動に転換する。この文化運動の核にあったのは、かつての民族的誇りを発掘しようという気運であった。独立への夢が挫折したあとにやってきた、かつての栄光への郷愁は、民族の過去の探索へと知識人を駆り立てた。

19世紀初頭、ハリコフ・ロマン主義グループと呼ばれるウクライナの貴族たちによって、ウクライナのルネサンスが展開する。フォークロアの収集、刊行を通じてウクライナ民族の覚醒を訴えた。また1840年代には詩人シェフチェンコがウクライナ語による詩を発表し、近代ウクライナ文語の確立に大きく寄与した。これらの活動は、ゴーゴリ（1809-

⁴ 中井和夫『ウクライナ・ナショナリズム』東京大学出版会、1998年、6頁。

⁵ 同上、5頁。

1852) の同時代に当たる。

1846年には、キエフでシェフチェンコや歴史家のコストマーロフなど若い知識人12人が集まって、一種の秘密結社キリル・メトディー団を結成した。この結社は政治的綱領として農奴性の廃止やスラヴ連邦形成などを掲げたが、本格的な活動を開始しない内に官憲の知るところとなり、1847年にメンバー全員が逮捕された。しかし、中井によれば、この団体は実質的には思想集団という性格が強く、文化運動の一環としてとらえることができるという。⁶

ゴーゴリの活躍していた時期におけるウクライナ民族運動はこうした分離志向が主流であった。しかし、合流志向の文化活動がなかったわけではない。歴史をさかのぼれば、ロシアへの合流志向の例は、17世紀、18世紀の教育あるウクライナ貴族たちの動きに見ることができる。キエフのモヒラ・アカデミーは正教研究・教育の拠点として高い水準にあり、優れた知識人、政治家、官僚を輩出してきた。彼らは卒業後、ロシアの中央へ赴き、宗教界、政府の行政職、出版、教育などの分野で要職を占めた。⁷

彼らの中には、植民地出身であることの劣等感よりもむしろ、ロシアに対し優位に立つ民族としての自負がみられる。

ロシアに対する文化的優越感と、ウクライナとロシアをおなじスラヴに属するものとして見る一種の一体感があった。ウクライナ人はロシアに屈服した結果としてロシアに合流して働いたのではなく、むしろ文化的に進んだグループとして帝国統治に奉仕したのである。彼らはロシア語を話し、ロシア帝国に仕え、このより大きな帝国を維持することに意義を見いだしていた。⁸

中井によると、この合流志向の動きはウクライナの民族運動において主流の位置を占めてはいないが、民族運動の精神的側面を考える上で重要であるとする。この合流志向が頓挫するのは、19世紀に入ってからのロシア政府の強力なロシア化政策によってであり、これによってウクライナ人たちはロシアとの共存よりも、ウクライナ自体の生存と発展を考えざるを得なくなった。⁹

1-2-3. 民族運動の文脈でみたゴーゴリの位置づけ

ゴーゴリと同時代のウクライナの民族運動はこのような展開をたどった。ではゴーゴリ

⁶ 同上, 9頁。

⁷ 同上, 12頁。

⁸ 同上, 13頁。

⁹ 同上, 13頁。

はウクライナの民族運動からみたとき、どのように位置づけることができるのだろうか。ゴーゴリはウクライナの知識階級の出身であり、作家としてロシアで活躍していたが、ウクライナの文化活動には関わりを持たなかった。むしろ、シェフチェンコらの行う文化運動には冷ややかであった。

従って、ゴーゴリが上記のようなウクライナ人による文化運動という意識を持って作家活動を行ったとは考えにくい。むしろゴーゴリは、ロシアの首都ペテルブルグに強い憧れを抱き、ロシア帝国で一角の人物になることを目指していた。高校卒業後すぐにペテルブルグに移り、作家として成功してからも一貫してロシア語で創作をおこなった。ゴーゴリは、先ほどの類型で言えば、明らかに合流志向の文化人であった。

ゴーゴリは、自分の文学活動を、ロシアを宗教的に啓蒙し、あるべき状態へ導くという目的と結びつけており、特に晩年にはその意識を強くしている。こうした意識はゴーゴリ作品が読者の間に引き起こした反応とは相入れず、たびたびゴーゴリを悩ませることになった。だが、ゴーゴリ自身の職業意識は、彼自身の個性に発するものではなく、ウクライナ貴族たちの伝統に与するものだったのではないだろうか。ゴーゴリにとって、ロシアで一旗揚げるといふ将来を思い描くことや、ロシア語で文学を書き、帝国に貢献しようとすることは、合流思考のウクライナの知識人としての選択だった。

1-3. ウクライナ国民文学の誕生とウクライナの民話ブーム

1-3-1. ウクライナの民話ブームとゴーゴリの文学

「ディカーニカ近郷夜話」と「ミルゴロド」は、ウクライナに題材をとった短編・中編集である。これらは、ロシア文学史においては、エキゾチシズムや異国を文学の一つの題材に掲げたロマン主義時代の産物とされる。

ウクライナの民衆世界を、その豊かな自然や生活風俗、超自然的なものに対する想像力とともに描き出すというゴーゴリの文学的実践は、19世紀初頭におけるウクライナ・ルネサンスのフォークロアの収集と連動した動きとしてみることも可能である。合流志向のゴーゴリと、分離志向のウクライナ・ルネサンスという方向性の違いはあっても、両者がウクライナに向ける視線は、過去への郷愁に満ちた視線である。

自由と栄光に満ちたウクライナはすでに過去のものとなってしまった。それは、急速に失われようとしており、保存されなくてはならない遺物であった。

ゴーゴリは、1829年4月30日付けの書簡を皮切りに、母親にウクライナの民衆の習俗、言葉について書き送るよう依頼している。

「あなたは鋭い知性と観察眼をお持ちで、小ロシアの習慣や風習をよくご存じですから、手紙で私にそれを教えることを承知してくださることと存じます。それは、わたしにはとても、とても必要なのです。」¹⁰

ゴーゴリはウクライナの民衆の風俗習慣をよく知らず、それを表現する語彙も持っていなかった。¹¹ ゴーゴリはもはや、言葉とウクライナの文化とのつながりを失ってしまった世代なのである。

「ディカーニカ近郷夜話」や「ミルゴロド」で描き出されたウクライナは、ウクライナをよく知らない人物の手によって再構成されたウクライナである。まがい物ではあるが、だからこそ、エキゾチシズムの輝きを放つウクライナである。

では、ゴーゴリの描き出したウクライナは、それ以前、及び同時代のウクライナの表象の系譜の中でどのような位置付けにあるのだろうか。

以下では、ゴーゴリ以前のウクライナ文学の歩みと、ロシアにおけるウクライナの表象の歴史を概観し、ウクライナ・ロシア双方におけるウクライナの表象の歴史の中における「ディカーニカ近郷夜話」の位置づけについて考察したい。

1-3-2. ウクライナ国民文学の歩み

17世紀にポーランドの支配から脱し、ロシアとの合流を果たしたウクライナでは、モスクワのツァーリのもと、コサックやウクライナの士族たちの旧来の自治権を認められた。文化においても、1632年にキエフに設立され、1701年にアカデミーとなったモギリャンスキイ・コレギウムを中心とする学術の発展や、18世紀には、西欧のバロック的伝統を取り入れてウクライナ・バロックと呼ばれる文学の実り多い時代を迎える。¹²

しかし、1708年にロシアとの戦争に敗れてからウクライナの自治権は次第に失われ、1722年にゲトマンの選挙制は皇帝による任命制になる。さらに、1764年にはゲトマン制自体が廃止され、1783年には農奴性が適用された。ウクライナは政治的な独立を失い、ロシアの行政区に改組された。これと併せて、ウクライナ語はロシア語の方言と見なされるに至り、ロシア語が公用語として用いられるようになった。

むしろこのような抑圧的な状況であったからこそ、18世紀後半から19世紀にかけて、

¹⁰ Гоголь Н. В. Полное собрание сочинений и писем в 17 томах Т. 10. М.; Киев, 2009. С. 99.

¹¹ 青山太郎『ニコライ・ゴーゴリ』河出書房新社、1986年、62頁。

¹² 伊東一郎「ゴーゴリとウクライナ・フォークロア」『ヨーロッパ文学研究』第24号、1976年、93頁。

ウクライナ国民文学の模索が始まった。I.コトリャレーフスキイ（1769-1838）によって、ウクライナ語による文学が書かれ、ヴェルギリウスの「アエネーイス」の翻案である「エネーイダ」（1798）や戯曲「ナタールカ・ポルターフカ」（1819）、「魔法使いの兵士」（1819）などの作品は近代ウクライナ語の成立に大きく寄与した。¹³

コトリャレーフスキイに続いて多くの劇作家や詩人がウクライナ語による作品を生み出した。ゴーゴリの父、ワシーリイ・ゴーゴリもその一人であり、喜劇を数多く残した。ウクライナの国民文学の成立が、ウクライナの自由と文化が抑圧されたまさにその時期であったことは決して不思議なことではない。ウクライナの黄金時代は失われ、それは現実のウクライナとはかけ離れた一つの理想郷になってしまった。このような理想化された表象としてのウクライナは、18世紀後半から19世紀にかけての文学に多くの材料を提供したのである。¹⁴

コトリャレーフスキイは作品の多くにウクライナのフォークロアを引用した。1818年にはA.パブトーフスキイが最初のウクライナ語文法書の「小ロシア語方言文法」を出版し、1819年にはツェールテレフによる最初のウクライナ民謡集「小ロシア古謡集の試み」が出版された。この中にはウクライナの民族叙事詩「ドゥーマ」が初めて活字の形で収録された。¹⁵

また1827年には、I.クルジーンスキイの「小ロシアの村」、M.マクシモーヴィチの「小ロシア民謡集」が出版される。マクシモーヴィチはプーシキンやゴーゴリとも親交があった人物で、この民謡集は同時代に大きな影響を与え、マクシモーヴィチに続いてさらなるウクライナ民謡集の収集が行われた。

ウクライナ史の出版も、18世紀後半から行われており、ゴーゴリの同時代には「ロシア人または小ロシアの歴史」と題する匿名の歴史書や、バーンティシ=カメーンスキイの「小ロシア史」（1822年）などが広く読まれた。¹⁶

ロシア文学において、ウクライナを扱った作品を最初に書いたのは、I.ナレージヌイであるとされる。ナレージヌイはポルタワ県ミールゴロド郡に生まれた作家で、ウクライナの神学校生活を描いた「神学生」（1824）はゴーゴリの「ヴィイ」に影響を与え、また「二人のイワン、または訴訟熱」（1825）はゴーゴリの「イワン・イワーノヴィチとイワン・ニキーフォロヴィチが喧嘩した話」に影響を与えたとされている。

ナレージヌイのほかに、O.ソーモフも、ウクライナ出身のロシア語作家としてゴーゴリに直接の影響を与えた。「ガイーダマーク」（1827）、「ルサルカ」（1829）、「財宝物語」

¹³ 同上、95頁。

¹⁴ 同上、95-96頁。

¹⁵ 同上、96頁。

¹⁶ 同上、97頁。

(1829)、「キーエフの魔女たち」(1833)などのウクライナ・フォークオアに取材した作品を発表した。

ウクライナ出身の作家たちばかりでなくロシア人作家も、ウクライナ・フォークオアに刺激されて作品を残している。その代表的なものがルイレーエフの「ヴァイナローフスキイ」(1824)とプーシキンの「ポルタワ」(1828)である。¹⁷

18世紀末から19世紀初頭にかけてのウクライナの文学において、ウクライナの表象は失われた理想郷として見いだされ、再生産されてきた。フォークオアの収集も、それがもはや生命を保ち得ないからこそ行われた運動である。こうしたウクライナの文学活動はロシアに持ち込まれて注目を浴びた。それは、失われた過去を発見し、文化の保存と表象の再生産に従事するという、共同体のルーツを構築する技法が、ロシアの文壇において目新しく、かつロマン主義の文学的な要請に表現の方法を与えるものだったからである。「ディカーニカ近郷夜話」をはじめ、ほぼ同時期に生み出された、ウクライナを題材にしたゴーゴリの作品群は、ロシア文学史とウクライナ文学史の合流地点に位置している。「ディカーニカ近郷夜話」は、ウクライナ国民文学の展開と、ロシアにおけるロマン主義文学の興隆の上に登場した。1820年代のウクライナをテーマとする文学のブームの中で、ウクライナの表象がロシア文学と出会い、大きく変わろうとした時期に、その方向性を決めたのが「ディカーニカ近郷夜話」であった。

このように考えたとき、「ディカーニカ近郷夜話」をはじめとするロシアにおけるウクライナの表象の系譜は、ロシアにおいてはゴーゴリやナレージヌイなど、ウクライナとロシアの間のマージナルな領域に身をおいて活動した作家たちと切り離して考えることはできない。ゴーゴリは、純然たるウクライナの作家とはいえないが、ロシア人でもない、出身、言語、文化背景の点でマージナルな存在である。この境界性は、ナショナリティを巡る言説において決定的に重要な要素として働く。

後述するが、ゴーゴリの「ディカーニカ近郷夜話」をはじめとするウクライナものは、ロシア語で書かれると同時に、ロシアにとっての外部の要素を豊富に持ち合わせている。これは内と外の境界に位置し、境界を巡る物語なのである。

ロシアとウクライナの関係史の中で捉えれば、ゴーゴリの作品は、フィクションではあれ、二つの共同体を巡るディスクールの一つである。19世紀においても、現代においても、ロシアとウクライナをめぐるディスクールは社会に存在し、それが絶えず政治的、民族的な意味を生成しながら表象を生み出してきた。こうした中で広く読まれ、想像力の源泉のひとつであったゴーゴリの文学は、ウクライナとロシアをめぐるディスクールと無関係ではあり得ない。そして、こうしたディスクールが多様な社会的・文化的コンテクスト

¹⁷ 同上, 98頁。

と繋がり合うことによって働くとするならば、言葉を紡いだゴーゴリ自身の固有の視座や、ウクライナとの関係性もまた、ウクライナをめぐるディスクールの一部として考察されなくてはならない。第二章では、ウクライナ人作家ゴーゴリの書いた、共同体やその境界を巡る物語という観点から「ディカーニカ近郷夜話」を考察していきたい。

2. 「ディカーニカ近郷夜話」の神話学的分析

2-1. 神話としての「ディカーニカ近郷夜話」

2-1-1. 「ディカーニカ近郷夜話」の枠組み

「ディカーニカ近郷夜話」は、第一部・第二部に分かれ、合わせて8つの物語が収められている短編集である。短編の多くは民族的色彩の強い、民話的な世界を描いている。それらはルディ・パニコーという人物が集めた物語として、読者に紹介される。ルディ・パニコーはウクライナのディカーニカにすむ蜜蜂飼いで、彼の家が客が集まり、互いに昔話、怪談など珍談奇談を披露する夜会が催される。夜会で語られた話をルディ・パニコーが本にまとめて出版したという設定が、「まえおき」で述べられる。

ここで、あたかも一人のウクライナ人が物語を収集し、ペテルブルグで出版するという、当時流行した文学活動が擬態されるのである。これはフォークロアの収集と紹介の身振りの模倣である。

まるで実際に語られ、採取された物語であるかのような枠組みは、これがペテルブルグの知識人階級の読者に提供された創作でありながら、神話や民話のように、近代小説とは異なる原理に息づく物語であるというコンテクストを用意する。

2-1-2. 結婚を巡る神話

先ほど、神話という言葉を使ったのには理由がある。筆者はここで、神話という概念を、宗教が聖典として掲げるテキストに限定せず、民族の創世神話や、叙事詩、英雄物語のような社会的・文化的な共同体の拠り所としての物語のような、ある集団を共同体たらしめるために機能する物語という意味で用いている。「ディカーニカ近郷夜話」をナショナルティの探求というテーマで見直したとき、上記のような機能を持つテキストに多用される要素がいくつも浮かび上がるのである。

「ディカーニカ近郷夜話」は、時間・空間の設定や物語の展開などに民話的な要素が強くみられ、内容も多分に寓話的だが、それだけでは神話とはいえない。「ディカーニカ近郷夜話」に神話的な機能を与えているのは、8編のテキストの多くに共通する結婚という

テーマである。

前編の「ソロチンツィの定期市」「イワン・クパーラの前夜」「五月の夜、または身投げした娘」はいずれも若い男女の恋と結婚をめぐる物語である。後編に収録された「降誕祭の前夜」「イワン・シポーニカとその叔母」も結婚をめぐる葛藤が物語の主軸をなしており、「恐ろしき復讐」においても、結婚のモチーフは登場する。以下では、結婚というテーマに注目し、「ディカーニカ近郷夜話」の神話性とその意味するところを分析する。

神話において結婚は、頻出のモチーフである。創世神話においては、男神と女神の婚姻から多くの神々が生み出される。王権の神話においては、外からやってきた王と土地の娘との婚姻が、王権の確立と正当性の根拠となる。このように、共同体の神話という観点からみた場合、結婚というモチーフは重要な位置を占めるのである。

それでは、「ディカーニカ近郷夜話」の物語において結婚がどのように描かれているのかを概観したい。まず「ソロチンツィの定期市」では、娘と若者との恋が、定期市に向かう道中に始まる。この恋は、市場での悪魔騒ぎを経て結婚という形で成就する。これとは反対に、次の物語「イワン・クパーラの前夜」では、失敗に終わる結婚が描かれている。若者は悪魔の助けを借りて、身分違いの恋人と結婚する。だが、すぐに破滅が訪れ、結婚は悲劇で終わる。続く「五月の夜、または身投げした娘」は、若者が、身投げした乙女との交換条件を果たした結果、めでたく恋人と結婚するという物語である。続く「消えた手紙」には、結婚のモチーフは出てこない。

後編でも結婚の物語は続く。「降誕祭の前夜」は、若者が愛する女の欲しがる女王の靴を、悪魔を使って手に入れ、結婚するという話である。何もかも上手くいくこの物語の後に、「ディカーニカ近郷夜話」の中で最も陰惨な物語「恐ろしき復讐」がくる。若い男女はすでに結婚し、子供もいるが、魔法使いの父親のために家族は破滅し、父親自身も悲惨な死を遂げる。続く「イワン・フォードロヴィチ・シポーニカとその叔母」は、叔母に結婚を勧められるが、結婚に恐れをなして一歩も踏み出せないイワンの物語である。ここでは結婚が最大のテーマとなるが、婚姻は成されず、何も起こらない。最後の「魔法のかかった土地」では、結婚のモチーフはなく、何も生み出さない不毛の土地が象徴的な形で現れる。¹⁸

概観しただけでも、「消えた手紙」と「魔法のかかった土地」以外の物語はすべて結婚のモチーフが登場し、多くの場合、それが物語の主軸となっている。

¹⁸ 作品分析にあたり以下のテキストを参考にした。Гоголь Н. В. Полное собрание сочинений и писем в 17 томах Т. 1. М.; Киев, 2009.

また、論文中に用いた作品のタイトル等の訳語、および引用箇所は以下の中村訳を参照した。ニコライ・ゴーゴリ（太田正一、中村喜和、青山太郎訳）『ゴーゴリ全集 1 ガンツ・キューヘリガルテン ディカーニカ近郷夜話』河出書房新社、1979年。

愛が成就する物語、悲劇に終わる物語と様々ではあるが、物語を動かす大きな力は若い男女の愛である。遊戯としての恋愛、すなわち当時の首都ペテルブルグの貴族の間では珍しくなかった、婚姻外の恋愛ではなく、子孫繁栄に結びついた愛こそが問題の焦点になるのである。愛の成就是、子孫の繁栄をもたらし、失敗は不毛へとつながる。ここに描かれるのは、物語世界の中の人々の、血族としての命運に他ならない。

結婚を主題とした6つの物語のうち、「ソロチンツィの定期市」、「イワン・クパーラの前夜」、「五月の夜」、「降誕祭の前夜」については結婚の実現のために積極的に行動するのは男性の方である。女性は、結ばれることを望みながらも目立った行動はしない。男性がまったく踏み出さない「イワン・フォードロヴィチ・シポーニカとその叔母」についても、行動を期待されるのはイワンの側である。このように、男女の行動は明らかに非対称であり、ここで描かれる結婚は、男性が試練や冒険を経て女性を獲得するという構図に基づいていることがわかる。

2-2. 物語の要素の分類と分析

2-2-1. 結婚にまつわる要素の分析

神々の結婚から幕が開く「ソロチンツィの定期市」では、定期市に出かける一家の娘が、見知らぬ若い男と恋に落ちる。男はコサックである点で共同体の内部に属しているようでありながら、どこからきたのか、何者なのか確たる形で示されない。この点で外来者としての外部性が残されている。二人は騒動の末に結婚の祝福を受ける。物語はそこで終わり、子孫の繁栄などその後のことについては一切書かれないが、二人の結婚はひとまずは定期市における乱痴気騒ぎで祝福される。ここには世界の転倒を伴うカーニバル的な非日常性を見て取ることができる。結婚は世界を転倒させ新たな秩序を築く転機なのである。

外来者としての男と土地の女という同様の構図は、「イワン・クパーラの前夜」にも見ることができる。「イワン・クパーラの前夜」に登場する若者ペトロは親が誰かが不明である。長くその地に住んではいても、無縁者としての外部性を属性としている。一方女は、名士の娘であり、土地との結びつきが強い存在である。ペトロは娘との結婚を望むが、娘の父親によって拒否される。ペトロは悪魔の力を借りて結婚に成功する。だが、結局、彼は魔の世界に連れ去られ、女は破滅する。土地にはその物語が語り継がれ、悪魔はこの土地に住み続ける。

「ソロチンツィの定期市」とは異なり、「イワン・クパーラの前夜」は呪われた結婚が描かれている。結婚によってもたらされたのは、死と不幸である。元々、不毛の土地であることが強調されたこの村には、子孫も作物も生み出されず、悪魔のいる世界が変わるこ

となく続く。不毛に終わる結婚である。

冒頭の 2 作が象徴的に示すように、「ディカーニカ近郷夜話」に描かれる結婚は、幸福をもたらし、将来の発展が期待される結婚と、死や不幸をもたらすか、不毛に終わる結婚の二種類に分類できる。全 8 編の物語において結婚がどのように描かれているのかを、具体的に分析するため、以下の項目をたて、Yes か No, いずれともいえない場合の 0 に分ける。

1 では結婚がテーマとなっているかどうか, 2, 3 では結婚がポジティブ・ネガティブいずれの変化をもたらしたか, 4, 5 では物語の中で誕生や死が生じたかどうかについて, + と- の記号を用いて示している。6, 7 については後述する。

1. 結婚がテーマに含まれているか。Yes : + No : -
2. 結婚から前向きな変化がもたらされるか。Yes : + No : -
3. 結婚から不毛がもたらされるか。Yes : + No : -
4. 物語中に誕生のモチーフがあるか。Yes : + No : -
5. 物語中に死のモチーフがあるか。Yes : + No : -

	ソロチ ンツイ	イワン・ クパーラ	五月の 夜	消えた 手紙	降誕祭 の前夜	恐ろし き復讐	イワン と叔母	魔法の かかった土地
1. 結婚	+	+	+	-	+	+	+	-
2. 前向き	+	-	+	+	+	-	-	0
3. 不毛	-	+	-	0	-	+	+	+
4. 誕生	-	-	-	-	+	+	-	-
5. 死	-	+	+	+	-	+	-	-
6. 魔女	+	+	+	+	+	-	-	-
7. 魔法使 い・悪魔	-	+	-	+	-	+	-	+

このようにみると、「ディカーニカ近郷夜話」の物語はそれぞれに異なる要素の組み合わせからなっており、同じパターンが繰り返されることは減多になく、様々な結婚の形が提示されていることがわかる。以下では、前向きな変化がもたらされる話に注目し、これらの物語における結婚に共通する要素について考えてみたい。

2-2-2. 魔女と母なる大地

分析に当たり、さらに二つの項目を加えることにしたい。それは、

6. 魔女が登場するか。Yes : + No : -

7. 男の魔法使いが登場するか。Yes : + No : -

という項目である。この二者は、「ディカーニカ近郷夜話」において妨害や手助けなど様々な形で結婚に介入しようとする存在である。面白いことに、この項目は結婚の成功・失敗と連動しており、有意な関係が見出される。以下では、魔女と魔法使いの存在意義について考察していきたい。

「ソロチンツィの定期市」の物語は、結婚の成功例の一つであるが、この物語には娘のほかにもう一人重要な女性の登場人物がいる。それは娘の結婚を阻止しようと躍起になる継母であり、人物描写では魔女としての特徴づけがなされている。これは母としての強い支配力を持ちつつ、不幸を望む魔女である。「ソロチンツィの定期市」以外にも「ディカーニカ近郷夜話」の物語に魔女はたびたび登場する。こうした魔女は、産みだす存在としての大地という形象とは矛盾するようであるが、異教の要素がキリスト教的世界観から見たときにネガティブな形象に転化したものである。したがって、やはり土地に根ざした女性的、母性的な形象の一類型である。

では魔女は、母なる大地としてのウクライナとどのような関係にあるのだろうか。魔女である母親は、「降誕祭の前夜」にも登場する。また「五月の夜」にも魔女のごとき母が出てくる。「五月の夜」では、魔女である母に敗北した娘は、死んでルサルカとなる。しかしルサルカがレフコの力を借りて魔女を倒したとき、物語は好転し、レフコはハンナとの結婚を勝ち取る。

神話において、愛と豊穡をもたらす女神は、死をもたらす存在でもある。古代メソポタミアの「ギルガメシュ叙事詩」に登場する、愛と逸楽の女神にして、軍神のイシュタルなどはその代表例である。女神の相反する属性のうち、「ディカーニカ近郷夜話」の継母や魔女は、死をもたらす闇の側面の形象化であると考えれば、彼らが克服されたとき、幸福な結婚が訪れることの説明がつく。「ディカーニカ近郷夜話」の主人公たちが、死をもたらす母を克服したとき、女性性は豊穡をもたらす大地のシンボルとして回復されるのである。

母としての形象は、魔女以外にも見出すことができる。例えば、「消えた手紙」では、エカテリーナ二世が登場する。主人公である「祖父」が、コサックの首領の書簡を渡す相手がエカテリーナ二世である。ここには、明確な結婚のモチーフは出てこないが、あえて結婚に似た要素を読みとるとするなら、コサックの首領（ウクライナ）＝男と、ロシア皇帝＝女との結びつきの成就という構図が見いだされる。「降誕祭の前夜」でもエカテリー

ナ二世が登場する。恋人に「女王様のハイヒール」¹⁹をせがまれた男が、悪魔の力を使ってエカテリーナ二世に靴をもらいにいく。女性の靴は、精神分析学ではしばしば、性的なメタファーとして機能する。エカテリーナ二世の靴を恋人に贈り、結婚するということは、この二人の女性を、靴を介して一つに重ねることを意味する。重なったところに現れるのは、人格を越えて抽象化された婚姻の相手たる女性である。

なぜ、エカテリーナ二世でなくてはならなかったのだろうか。エリザヴェータ帝でも、パーヴェル一世でも、あるいはその妻でもなく、エカテリーナ二世が2回も「ディカーニカ近郷夜話」に登場した理由は何だろうか。「ディカーニカ近郷夜話」においては、母なる大地の変奏としての女性の形象がいくつか登場するが、エカテリーナ二世はその肯定的な表象として提示されているのではないだろうか。「ディカーニカ近郷夜話」において、「ソロチンツィの定期市」の冒頭に示された母なる自然は紛れもなくウクライナの大地なのだが、ロシアもまたエカテリーナ二世を介して母なる存在として、あるいは女性として表象される。帝国と属領という関係でロシアとウクライナをとらえると、ロシア=男、ウクライナ=女という構図に形象化されることが考えられるが、「ディカーニカ近郷夜話」のいくつかの物語ではむしろ、ロシア=女、ウクライナ=男という構図が採用される。ゴーゴリにおいてはロシアも女性的な大地として一続きに捉えられており、ウクライナの大地との間には明確な境界が引かれていない。一方、勇猛なコサックは、活劇の主人公として冒険の果てに女性と結ばれる、純粋に男性的存在である。いずれにしても、「ディカーニカ近郷夜話」において結婚が成功するとき、大地は望ましい母・女として回復され、男は障害を克服して結婚を成就させるという共通のパターンが抽出できる。

2-2-3. 魔法使い、悪魔

では、失敗に終わった結婚について見ていきたい。結婚ののち不幸がもたらされる物語として挙げられるのが「イワン・クパーラの前夜」と「恐ろしき復讐」である。「恐ろしき復讐」は、最初に赤ん坊のいる夫婦が登場する。しかし妻カテリーナの父である魔法使いが現れたときから破滅が始まる。夫と子は死に、カテリーナは狂気の末に非業の死を遂げる。魔法使いもまた祖先の因縁によって悲惨な最期を遂げるという救われない物語である。この物語は「ディカーニカ近郷夜話」の中でも、前史が設定され、過去との因果が解き明かされるという二重構造を持つ異色の短編である。従って、様々な観点からの分析が可能なのだが、ここでは結婚に絞って考察することにする。

¹⁹ ゴーゴリ『ゴーゴリ全集1』, 262頁。

「イワン・クパーラの前夜」と「恐ろしき復讐」の二つに共通するのは、悪魔的な男が登場することである。幸福な結婚の物語と同じく、この2話でも若者は結婚を成就するために、あるいは維持するために葛藤を余儀なくされる。克服されるべき存在として、「イワン・クパーラの前夜」ではバサヴリュークという悪魔が、「恐ろしき復讐」では魔法使いの父が現れる。しかし「イワン・クパーラの前夜」のペトロは悪魔と取引をし、共犯関係を結んだが、対決はしない。「恐ろしき復讐」の若者ダニーロは魔法使いと対決した結果、敗北して死んでしまう。

これに対し、成功した結婚の物語の多くには、魔女が現れる。先ほども述べたように、魔女は悪意に満ち、死をもたらす恐ろしき母の一形象なのだが、これを克服することは、自然の恵み深い側面を回復し、世界の秩序を回復することである。

このように魔女と魔法使いは、「ディカーニカ近郷夜話」においては非対称な存在である。魔法使いや人の姿をとった悪魔は、大地を征服し、不毛な状態に留め置く。そして、若者は、これに敗北し、破滅を呼び込むのである。

2-3. 王権の神話

2-3-1. 読解のモデルとしての王権の神話

「ディカーニカ近郷夜話」における、結婚に関わる共通の物語要素は以下のようにまとめることができる。

- ・愛し合う若い男女がいる。
- ・男は老いた男や悪魔と戦う。
- ・あるいは二人は母なる存在の助けを得る。
- ・試練を経て勝利した場合、新たな世界が築かれるか、それへの期待が示される。
- ・敗北した場合、老いた男に起因する死と不幸が蔓延する。

上記のパターンのそれぞれが神話の物語要素としてよく見られるものであるが、特にこれらの組み合わせの上に成立するのが、王権の神話である。

王権をめぐる神話は世界各地にみられ、王の由来とその権力の正当性を説き起こすために語られる。「ディカーニカ近郷夜話」は、直接的に共同体における統治権力のありように言及する物語ではないが、王権の神話を読解のモデルとして考察したとき、「ディカーニカ近郷夜話」の結婚というテーマが持つ意味は明確になる。

世界各地に存在する王の結婚と王権をめぐる神話は多様であり、王は人間のこともあれば、神の姿をとって語られることもある。つまり、神格や特別な力を持つ存在がいかによつて王になったかを語り起こすのが王権の神話である。

その物語の構成要素は非常にシンプルな形で抽出することができる。まず、王は外部から到来する。王は共同体の内部から選ばれるのではなく、元々土地の人間ではない人物がやってきて、王の座を獲得する外来王であることが多い。

この来訪者は、王として君臨し、持てる能力を土地の為に行使することと引き替えに、土地から贈与を受け取る。それは、農産物・海産物などの神に捧げる供物のような形態をシンボリックにとることもあるが、贈与は土地が生み出す物でなくてはならない。そして、神話において土地が生み出す最大の贈与は女性である。女性を差し出すことは、来訪者の王権を認めると同時に、来訪者を土地につなぎ止め、永続的な関係を維持することを意味する。来訪者は、何らかの葛藤や手続きを経て、土地の女と結婚することによって、正当な王としての、あるいは神としての権威を保証されるのである。²⁰

神話において、結婚は、神や王として君臨することと不可分の関係にある。創世神話においては男神と女神の結婚が始めにあり、その後子供たちが生まれる。神話は結婚すること、産むことという親族関係のレトリックによって構成される。

土地が生み出す最大の贈与が女であるのは、女との結びつきによって子孫が生み出されるからである。つまり、土地から生まれた妻としての子孫を生み出すか、生み出さないかという問題が結婚と結びつく重要な要素として存在する。

「ディカーニカ近郷夜話」全体の最初の部分にあたる一作目の「ソロチンツィの定期市」の冒頭で性交のメタファーによって描写されるウクライナの自然は象徴的である。古代の神話で繰り返されてきた空（男）と大地（女）という組み合わせはここでも取り入れられており、同時に、「ディカーニカ近郷夜話」の世界が父権的な一神教であるキリスト教的世界の外にあることを教えてくれる。ウクライナは豊穡な大地の恵みをもたらす女性としての属性をもつと同時に、キリスト教の父権性とは対照的に母権的な世界でもある。

王権の神話は、結婚というモチーフを通じて共同体の始源を語るものである。外来王の王としての正当性を主張し、証し立てて、成員にそれを納得させることがその政治的な機能である。結婚と子孫繁栄という親族の語彙で組み立てられたロジックが、こうした神話においては国や共同体の原理をなしている。幸福な結婚は「ディカーニカ近郷夜話」において新たな世界の秩序の創世を物語る一方、不幸な結婚は、血族の終焉、すなわち共同体の死を意味する。

「イワン・クパーラの前夜」と「恐ろしき復讐」において、悪魔（魔法使い）が老いた男、あるいは古くからその土地にいる男の形象をとるのは、若き外来王に対する古き王であることを示している。古き王を倒し、新たな王が君臨する物語は、王権の神話の一つのバリエーションである。若者が到来し、以前から土地を治めてきた古き王と対決する。こ

²⁰ 網野善彦、上野千鶴子、宮田登『日本王権論』春秋社、1988年、44, 49頁。

れに打ち勝てば、新たな王国が築かれるが、敗北すれば死が待っている。

2-3-2. ナショナリティ探求の寓話

では、「ディカーニカ近郷夜話」のウクライナの形象と、ナショナリティ探求というテーマに、王権の神話の構造はどのように関わっているのだろうか。共同体や国家が自己意識を持つためには、内部である自己に対する外部の認識が不可欠である。象徴的な形であれ、実在の地域などの実質的な形であれ、共同体にとっての他界が観念されることによって、共同体は自己意識を持ちうる。内と外の弁証法から出発するナショナリティへの問いは、境界を巡る問いと不可分である。²¹ 王権の神話は、まず外来者を迎え、それを内部化していくプロセスを語るものであり、この意味で外部と内部の境界を問題化する視点が、物語構造の中に組み込まれている。

前述したように、ゴゴリ作品の中でもウクライナを題材にした作品は、19世紀から知識人のみならず、民衆、子供たちを含む広範な読者の間で高い人気を博してきた。ロシアから見れば、ウクライナは帝国の一部でありながらも純粋な内部ではない。ゴゴリ作品のウクライナものも同様にマージナルな性格を持つ。受容の現場が我々に示したのは、このマージナルな性格ゆえに、ゴゴリのウクライナものは、ナショナリティ構築の場になり得たということである。「ディカーニカ近郷夜話」はこの点においても境界への意識や想像力を高める条件を備えているのである。

さらに、王権の神話が本来的に共同体の始源を説き起こす機能を持つことも重要である。ナショナリティの神話は、過去と未来の二点をつなぐ直線的な時間を前提とする。この時間を遡ったところに始源を、反対の極点に終末を構想する。絶対性をおびた始源と終末の間に直線的に続く物語がある。その現れが神話であり、歴史である。²²

19世紀初頭のロシア文学における歴史記述への情熱は、ロマン主義とともにヨーロッパから導入されたものであるが、18世紀のロシア文学に、ロシアの民族的なルーツや、近代化以前の失われた理想郷の表象を求めることは難しかったのではないだろうか。歴史をひもとけば、ロシアはキエフに建国されたルーシに遡る。

ゴゴリの同時代に当たる1820年代のロシアの知識人たちは、ウクライナのフォークロアを自分たちの過去の文化遺産として見なしていたという。²³ ロシアのアイデンティティを確立するべく、過去にさかのぼってルーツを探求すれば、歴史を通じて地理、言語、宗

²¹ 同上、8-10頁。

²² 宇野公一郎「始原論と終末論」『岩波講座 文化人類学 第10巻 神話とメディア』岩波書店、1997年、49頁。

²³ Марчуков А. Украина в русском сознании. Николай Гоголь и его время. М., 2011. С. 88.

教、文化のあらゆる側面において変化の大きかったロシアには、途切れることなく続く固有性が乏しいことが明らかになる。ウクライナの表象をロシアの失われた理想郷として見なす錯誤には、19世紀にロシアの歴史的なルーツを探求する際に人々が直面した、歴史に基づくアイデンティティの確定不能性が見え隠れする。こうした困難は解消されることなく、19世紀を通じてロシアとは何かという問いを生み出し続けた。「ディカーニカ近郷夜話」は、境界と始源を巡る物語であり、創世神話としての構造を備えているがゆえに、19世紀を通じて、「我ら」とは誰かという問いを受け止め、ナショナリティ探求に向かう想像力を大いに刺激したのである。

3. ウクライナをめぐるディスクール

「ディカーニカ近郷夜話」が王権の神話としての構造を備えているとするなら、ここに登場する人物や土地などの形象は何を表しているのだろうか。

この問題は、ディカーニカ=同時代のウクライナ、というような単純な図式をもって答えることはできない。というのも、この問題は文学作品が同時代の社会と結び結ぶ重層的な関係性の中で考察されなくてはならないからである。

以下では「ディカーニカ近郷夜話」を、ゴーゴリ以後のロシアの文学との比較や、ウクライナ人作家としてのゴーゴリのあり方、作品のディスクールの特徴などの視点から分析し、「ディカーニカ近郷夜話」が何を表現していたのかについて考察する。

3-1. 「ディカーニカ近郷夜話」のディスクールと同時代

3-1-1. 結婚から逃げる男の物語

「ディカーニカ近郷夜話」はウクライナを舞台にした民話風の物語が多く、同時代のウクライナ人作家たちによる作品や、フォークロアの収集との強い関連を見せている。しかし、「ディカーニカ近郷夜話」は、明らかに同時代のロシアに向けて書かれた作品である。

「ディカーニカ近郷夜話」の主要なテーマである結婚は、この作品を神話化する役割を担っているが、同時に、これは当時のロシアに発せられたテーマでもある。では、「ディカーニカ近郷夜話」の中の結婚の物語は、ロシアにおいてどのようなディスクールであったのか。8編の物語の内、唯一、同時代の社会を舞台にした「イワン・フョードロヴィチ・シポーニカとその叔母」を例として考察する。

「イワン・フョードロヴィチ・シポーニカとその叔母」は結婚をテーマとしながらも、結婚、誕生、死のいずれも起こらず、それだけに不毛さの際だつ作品である。また、民話

的・民族的な要素の色濃い「ディカーニカ近郷夜話」の中で、唯一、近代の平凡な農村を舞台にしており、悪魔や魔法使い、魔女などの異形が登場しない点で、異色の存在である。イワンは叔母から執拗に結婚を勧められるが、結婚すること自体に抵抗を感じ、後込みする。イワンは妻がポケットに入っているといった悪夢のような幻覚をみるようになる。「イワン・フォードロヴィチ・シポーニカとその叔母」の物語では、現実のごとき世界に、人物の内側から幻想的世界が滲みだしているのである。

イワン・シポーニカのように、結婚を避けたがる男はゴーゴリの他の作品にも登場する。戯曲「結婚」では、主人公は結婚しなくてはいけないと言う周りの圧力を受けて、結婚したいような気になっているが、いざ結婚式に直面するや、必死になって逃げてしまう。

3-1-2. メタファーの交代 生殖からアレルギーへ

ゴーゴリ作品に限らず、19世紀のロシア文学には結婚が不全や失敗に終わる作品は少なくない。ドストエフスキイの「白痴」やトルストイの「アンナ・カレーニナ」のように、重要作品においてはむしろ、成就しない結婚や不幸な結婚が主要なモチーフとなっている。前述のように、神話において結婚は、誕生や未来につながる節目であるがゆえに、世界を突破する力を秘めたモチーフとなる。しかし結婚の成就しないゴーゴリの作品世界では、代わりに死が溢れ返る。ゴーゴリ以後の作家たちの作品においても、不幸な子供や死のモチーフはでてくるが、生命の横溢を思わせるモチーフはほとんどでてこない。これは何を意味しているのだろうか。

世界各地に残る神話は、誕生の物語に満ちている。創世神話では神々が次々に子供を増やし、人間の物語においても子孫の繁栄が執拗なまでに語られる。家族の物語、すなわち結婚と生殖を軸とした神話構造は世界を秩序付け、把握する方法なのである。それに対して、近代小説に極端に誕生のモチーフや赤ん坊が少ないということは、共同体の成立や世界の把握において、もはやこの神話構造が機能していないことを意味する。

では、代わりにどのような物語が求められたのか。近代のロシアの小説、とりわけロマン主義以降の文学は、ナショナリティの構築を通じてロシアを導くことを使命として引き受けていた。ナショナリズムの成立要因として、外部との差異によって生まれる自意識は不可欠である。更にそこには「我ら」に共通する内的な本質、すなわち、アプリアリにある性質が備わっているという幻想が必要である。これを土台として、国民性の強化と再生産、そして新たなロシアへ向かう、進歩という名の歩みがあればよい。これを記述するには、何らかの問題があり、その問題が明らかにされるが、解決されないで終わるという話の構造が好ましい。解決の未然が進歩の必然を語るという構造になるからである。近代

の神話は、自一他の弁証法〔両者を越えて、何かを生み出す〕ではなく、自一他の差異の増幅〔問題や違いを拡大していく〕によって語られるのである。

自一他の差異の増幅は、同じ生物学的比喩を使うならば、アレルギー反応を通じた、自他の境界の耐えざる確認に近い。二つの生物学的な比喩を説明する上で、しばしば取り上げられるのが個人主義である。生殖のメタファーにおいては、親族の制度が一つの生命の流れとして捉えられる。その中で人間は、与えられた命を次の世代につなげる媒介者ではない。それに対して、親族の制度が弱体化し、個人の幸福や人生が重視されるようになると、人は絶えざる自己認識の中で個を維持しようとする。

ここには近代に入って登場した、人間の生命をめぐる思想の大きな転換が関係している。フーコーによれば、18世紀まで学問の主流の座にあった博物学は人間を、他の動物と同様、分類される種として捉えていた。しかし19世紀になって、死すべき人間の肉体の機構が学問の対象となったとき、人間は限りある命を持った生き物として捉えられるようになる。生殖からアレルギーへと向かう生物学的なメタファーの転換は、人間の観念を巡る変化と不可分である。近代の小説は、19世紀の人間を巡るエピステーメーの必然として現れた。

3-1-3. 偽の神話、偽史としての「ディカーニカ近郷夜話」

このように考えると、結婚を共通のテーマとし、そこから産み、発展する、あるいは死に、破滅するという二つの極の間でいくつもの物語が語られる「ディカーニカ近郷夜話」は、明らかに生殖のメタファーを採用した物語である。

何も起こらず、成就しないという点で特徴的な「イワン・フォードロヴィチ・シポーニカとその叔母」の物語の中にも、作物の話、食べ物の豊かさの話、そして見合い話など、生命の誕生に触れる話題が沢山見出されるという点で、生殖は重要なテーマになっている。「ディカーニカ近郷夜話」は、不毛に終わる結婚を描くという点では近代以降のロシア文学と繋がっている一方で、近代以前のエピステーメーに属し、一連の物語はまだ近代化されない世界の思考を保存しているのである。

こう考えると、19世紀末にゴゴリの「ディカーニカ近郷夜話」が、民衆向けの海賊版や一枚版画、小冊子といったメディアにおいて圧倒的な人気を誇った理由が説明できるのではないだろうか。ロシアにおいて近代化は階級、教育制度、産業などの様々な障壁によってまだらに進行していたため、19世紀末においても古い世界観の中に暮らしていた人々が多く存在していた。彼らにとって、「ディカーニカ近郷夜話」の物語は、なじみ深い物語であったはずである。

しかし、ゴーゴリが「ディカーニカ近郷夜話」を執筆し、発表したのは 1820 年代のペテルブルグの文壇、すなわちロシアの文化の最先端である。外国文学の影響下ですでに 20 年ほど、個を問題化する文学が主流であった時代に登場した「ディカーニカ近郷夜話」は、むしろその古めかしさにおいて異彩を放っていたはずである。

「ディカーニカ近郷夜話」が様々な題材の民話を集めたという形式ではなく、結婚という一貫したテーマで、しかも民話風に書かれた創作であったということは、古い世界観を際だった形で立ち上げるために効果的であった。だがそれだけではない。これまで論じてきたように、結婚というテーマは、王権を巡る神話のように、神話の物語の中で重要な意味をもつ。王や神がいかにしてこの土地にやってきて、治めるようになったのかという物語はすなわち共同体の歴史である。「ディカーニカ近郷夜話」には王や神が君臨する物語は一つもでてこないが、そのかわり、男女の出会いと結婚を通じて世界がどう変化し、どこへ向かうのかという小さな歴史的な神話のバリエーションを示した。個々の物語は、大半が民族的かつ幻想的な色彩の濃い、閉じた世界に描かれている。結婚のテーマはそれらの小さな世界に歴史を与えることで、流転を繰り返す生きた世界としての自律性を与えるのである。これは民話的題材に仮託した偽史の集まりとしてみることもできる。

では、それはどこの歴史なのか。文字通り、それはウクライナに舞台をとった偽史だろうか。そうではない。失敗に終わる結婚と不毛の続く世界がその後のロシア文学を貫くビジョンであったように、「ディカーニカ近郷夜話」とロシア近代文学は挫折した王権の神話という点でひと繋がり関係にある。ディカーニカはロシアなのである。

3-2. ルディ・パニコー、ディスクール of 擬態

3-2-1. 枠組みとしての語り部

ウクライナの民話やコサックの物語は当時、文学的な題材として発見され、注目を浴びていた。ゴーゴリはデビュー作「ガンツ・キューヘリガルテン」を酷評され、書店から本を回収するという苦い経験をしたものの、作家の道をあきらめることなく、成功への道を模索していた。ウクライナを題材にした作品を書くということは、ゴーゴリの当時の状況からみて、有り得べき選択だった。

しかし、ゴーゴリはウクライナの民話を実際に採取してきて、発表したわけではない。前述したように、ゴーゴリは「ディカーニカ近郷夜話」を書くにあたり、母親に手紙で題材やウクライナ語の語彙を教えてくれるように依頼している。このエピソードは、ゴーゴリがウクライナについて詳しく知らなかったことを説明するために用いられることが多いが、その一方で、「ディカーニカ近郷夜話」が採取した民話をそのまま収録したわけで

はなく、断片的な情報からゴーゴリが組み立てた創作であることを示してもいる。ゴーゴリは神話的、かつ偽史的な要素をもつ民話風の物語を創作した。「ディカーニカ近郷夜話」の物語は、テーマの点でも、描写においてもイメージ上のウクライナらしさを濃厚に持っている。作品の「らしさ」と、実は新たな創作であるという事実の落差は、作品の偽物性を強烈に際立たせる。民話の採取という、学術的な手続きによって本物らしさを担保したウクライナの民話がかもてはやされる一方で、創作されたウクライナ民話調の作品は文壇においてどのような位置づけを得られるだろうか。実際には、ウクライナに題材をとった小説も書かれており、文学的な関心は高かったといえるが、あえて民話にする以上、それが読者に受け入れられる文学的な枠組みが必要であった。それが、ルディ・パニコーという語り部である。

「ディカーニカ近郷夜話」の8編の物語は、ルディ・パニコーが聞いた物語を編纂して出版したという設定がなされている。もちろんこの設定もフィクションであるが、肝心なのは、本当にあった話として語られるということである。ルディ・パニコーを語り部とする物語もあれば、他の人物の声を借りて叙述される作品もある。例えば「イワン・クパーラの前夜」は、ルディ・パニコーの夜会の常連であるフォマ・グリゴリエヴィチが、自分の祖父から聞いた物語だという設定により、実話であることが強調される。怪談のように、枕で本当の話だと強調してから始めるのと同じである。実際には聞く側は全部作り話であるとわかっているとしても、その架空の真实性をひとまずは飲み込んで、語りの場を共有することによって、奇譚は企図された効果を十全にあげる。ルディ・パニコーの前書きは「ディカーニカ近郷夜話」の物語が語られ、聞かれる〔読まれる〕場の文脈を規定する重要な枠組みを提供するのである。

しかし、それだけではない。ルディ・パニコーはペテルブルグの読者たち、すなわち活字化された「ディカーニカ近郷夜話」を読む読者たちへ向けて言葉を発する。それは実在の読者たちであり、現実の世界である。ルディ・パニコーの読者への語りかけによって、現実の読者の世界と、ルディ・パニコーがひと繋がり世界を共有していることが示される。ルディ・パニコーは「ディカーニカ近郷夜話」の閉じた世界と、1820年代のペテルブルグの読者という、現実と想像の世界という境界を越え、地理的、時代的な隔たりも越えてしまう重要な媒介者なのである。

ルディ・パニコーは出版するという自分の行為について第一巻の「まえおき」の冒頭で執拗に言及する。

これは妙ちきりんだ、『ディカーニカ近郷夜話』だって？いったいどんな『夜話』なんだ。それ

に厚かましくも、刊行はどこかの蜜蜂飼いときた！ [中略]²⁴

続く第二巻でも印刷して読者に届けるという身振りについて言及する。

この巻にはわし自身の話も入れるとお約束したことを、忘れたわけではない。事実そうだったのだが、わしの話のためにはこのくらいの本が少なくとも三冊は要ることが分かった。それだけを別に印刷に付そうかとも考えたが、思い直した。諸君がどんな顔をされるかよく分つるからである。²⁵

作者が聞いた実話として物語を提示するという形式は、当時の小説によく見られた。しかし、「ディカーニカ近郷夜話」について言えば、ルディ・パニコーは、「ディカーニカ近郷夜話」の8編の物語を近代のペテルブルグの社会に、同時代の小説として成立させるパッケージであった。それは、あえて神話風に偽史的に書いた物語を世に送り出すための入れ物である。

3-2-2. ロシア人の眼差しの擬態

「ディカーニカ近郷夜話」が発表された当時、ウクライナ出身の作家たちによるクライナに題材をとった作品は人気があったが、彼らの文学活動の発展に対して冷やかな姿勢をとる者もいた。当代随一の文芸評論家、ベンリンスキイは、ロシア語で作品を書いたゴーゴリを高く評価したが、ウクライナ語は表現力豊かな言語にはなり得ないとし、ウクライナの作家たちを、フォークロアの収集家であって本物の作家ではないと考えていた。²⁶ ロシアでは、文学は社会的に重要な意義があると考えられていたが、ウクライナ人の書く作品はロシア帝国にとっては大した価値を持たないという意識がベリンスキイの言葉から読みとれる。ロシア帝国における中心的存在はロシア民族であり、それ以外の民族は実際には蔑視の対象になるという帝國的な民族差別は、文学の領域でも健在であった。

ロシア人が求めるのはミルクと蜜のあふれる美しき国、生き生きした自然に彩られたコサックの楽園としてのウクライナであり、愛玩物以上のものではなかったのである。ゴーゴリの作品、「ディカーニカ近郷夜話」には、こうした、ロシアの知識人に求められるウクライナ像がことさら強調されて描かれている。ゴーゴリが提示したウクライナは、ロシ

²⁴ ゴーゴリ、『ゴーゴリ全集1』、96頁。

²⁵ 同上、239頁。

²⁶ George S. N. Luckyj, *Between Gogol' and Ševčenko: Polarity in the Literary Ukraine: 1798-1847.* (München: Wilhelm Fink Verlag, 1971), pp. 70-71.

ア人の読者が喜ぶように作られたウクライナであり、フォークロア集のような形式を持つてはいるがフォークロアではない、偽物である。「ディカーニカ近郷夜話」は、当時のウクライナとは似ても似つかぬ、想像上の世界なのである。ゴーゴリはいち早く成功したナレーズヌイに範をとり、ウクライナ出身者に求められる役割を演じ、ロシア人が見る夢を作品の形にしてみせたのである。

ウクライナを文学的形象として発見するロシアの知識人や文壇の眼差し。ウクライナの民話を収集し、出版する、あるいはそれを元にした作品を小説化して発表する文学活動。ウクライナの民話が、ロシアのナショナリティ構築におけるリソースとして利用されるという受容の状況。そしてウクライナ文学者に対するオリエンタリズム的なまなざし。ルディ・パニコーの語りの形式と、「ディカーニカ近郷夜話」のディスクールのこうした構造は、当時の文学界の、あるいは文壇におけるウクライナの物語に向けられた重層的なディスクールを丸ごと擬態しているのである。

「ディカーニカ近郷夜話」に納められた物語が、民話や神話のクロノトポスを用いた見事な創作、すなわち偽物であることはこの擬態ぶりを際だたせ、「ディカーニカ近郷夜話」のディスクールが、ロシアのウクライナを巡るディスクールのパロディであることを明確に示している。

3-3. 反転した世界

ゴーゴリは、同時代のロシアの知識人たちのディスクールを擬態することによって、最終的に何を表現し得たのだろうか。

ここで、「ディカーニカ近郷夜話」では結婚をテーマにした王権の神話を基本構造としながらも、定石通りには成就しない物語が何度も繰り返されるということを思い起こそう。「恐ろしき復讐」や「イワン・クパーラの前夜」のように愛に忠実であろうとした人々は破滅する。その一方で、長く結婚生活を送っている夫婦は、愛によって結びついてはいない。キリスト教の世界において称揚される愛は、「ディカーニカ近郷夜話」においては世界の調和を破るもの、悪魔や死を呼び込むものとなる。また、「五月の夜」や「降誕祭の前夜」のように、首尾よく結婚した二人は、悪魔や魔物の手助けを借りている。「ディカーニカ近郷夜話」の世界では、鏡の中のように、価値が反転する。そこでは愛を貫きまっとうに生きる者ほど報われない。

3-3-1. 卑小な悪魔

「ディカーニカ近郷夜話」において、トリックスターとして現れるのが、悪魔である。

東スラブのフォークロアに登場する悪魔は二つの系譜を持っている。一つは、キリスト教におけるサタンであり、神に敵対する存在として示される。二つ目は、キリスト教の世界観の中に組み込まれるサタンに対して、キリスト教を受容する以前から民衆の世界に息づく、異教的存在としての悪魔たちである。後者は、チョルト (чёрт) と呼ばれ、サタンなどとはかなり性格を殊にする。それらは妖怪に近い。水辺の妖怪などのように持ち場が決まっており、人間に悪さを仕掛ける一方、人間にだまされることもある、大して破滅的な力を持たない悪魔たちである。

こうした悪魔たちの特徴は、変身が上手いという点である。様々な生き物に変身するほか、魅力的な人間になりすますこともお手のものである。ゴーゴリ作品に登場する悪魔たちの多くはチョルトの方である。²⁷

スラブ世界においては、神と悪魔、光と闇という世界の二分法がコスモロジーの基礎をなしていたという。精神の世界も物質の世界も、この二分法に基づいて理解されていた。ルーシの中世文学に登場する悪魔は闇の世界に住むものという位置づけにある。²⁸ゴーゴリにおける悪魔の形象は、唯一神を信仰するキリスト教の世界観ではなく、キリスト教の教義を取り入れながらも、その古層に広がる異教的世界と混ざり合った民衆の想像力の産物である。

したがって、悪魔が支配するディカーニカの世界は、まだ完全にキリスト教化されていない世界である。悪魔に翻弄される「ディカーニカ近郷夜話」の物語には、物語を構成するパースペクティブの一つとして、キリスト教の視点が組み込まれている。まだ異教の神や悪魔の支配を克服できていない、未然の状態であるとするのはキリスト教の側に立ったディスクールであり、このディスクールの主権者の存在を暗示する。

新たな王になり、この世界を救うのは、古い王と対決して勝利し、古い王から何らかの形で主権を継承する存在だけである。それは誰なのだろうか。物語が、神を待ち望む、キリスト者の視点から書かれていることを考慮するならば、新たな王となりうるのはキリストその人であろう。しかしそれはまだ成就しない。ここには、約束されたキリストの再臨を待ち望み、新たな王国が築かれることを夢見ながら、不条理な世界を堪え忍ぶキリスト教的な世界観の構造が存在している。この未完の王国の構造は、始源を設定し、歴史の構築を通じてあるべき姿を模索するナショナリズムの思考と重なる。

ロシアの文壇のディスクールを擬態して見せたゴーゴリが、その身振りによってロシアの読者たちに突きつけたのは、ウクライナに仮託した、同時代のロシアの姿である。「ディカーニカ近郷夜話」は、ウクライナを語るロシアのディスクール、ウクライナを眺めるロ

²⁷ Putney Christopher, *Russian Devils and Diabolic Conditionality in Nikolai Gogol's Evenings on a Farm near Dikanika*. (New York: Peter Lang, 1999), pp. 56-68.

²⁸ *Ibid.*, p. 17.

シアの視線を通じて、当のロシアを語るための物語文法を提示して見せたのである。

結び

ゴーゴリの同時代に、ウクライナの文化的な形による民族運動は活発化した。その中でゴーゴリがロシアの知識人の間に存在するウクライナに対する帝國的な差別感情や、支配-被支配の非対称な関係性がディスクールの構造の中に組み込まれていることに対して無自覚であったとは考えられない。

「ディカーニカ近郷夜話」には、ゴーゴリがロシアを導こうとする合流志向のウクライナ人としての意識を持ちながらも、帝国のロシア人たちから自分の側に向けられた支配を感知し、その上で、支配の身振りを擬態するというディスクールの構造を見ることができ、ゴーゴリは、そのまなごしの仕組みをそのまま真似して見せ、そのロシア人の眼差しで構成された愛玩物としてのウクライナを作り上げて見せたのである。それは見事な鏡であった。その鏡には、ロシア人が頭の中に思い描くウクライナが、すなわちロシア人の妄想が、それを構成するディスクールごと映し出される。ウクライナに仮託されてはいても、そこに映し出される世界は、鏡を覗く側の世界、すなわちロシアにほかならない。

ロシア帝国の支配のディスクールはゴーゴリによって抽出され、作品を生み出す原理と化した。それは、ロシアそのものをオリエンタリズムのまなごしでみつめ、描き出すという、マージナルな位置に立つ作家にこそ可能なものであった。ゴーゴリは見事な鏡を創る技術を磨きあげ、その冴え渡る筆をその後の文学活動でロシアに向けたのである。

A Mythological Study of Nikolai Vasilievich Gogol's work "*Evenings on a Farm Near Dikanka*"—Gogol's National Identity and Discourse of Ukraine

ONO Tokiko

This paper analyzes Nikolai Vasilievich Gogol's work "*Evenings on a Farm Near Dikanka*" as a myth of Ukraine. Although from Ukraine, Gogol wrote all of his works in Russian. The work is analyzed in connection with his complicated national identity and the work's hidden construction is deciphered.

First, Gogol's national identity is studied in the context of the history between Ukraine and Russia. Ukrainian intellectuals carried their ethnic cultural movement from the 18th century to the same period as Gogol. Gogol was a typical pro-Russian intellectual and had no interest in the Ukrainian cultural movement. However, he was not free from his complex identity.

Second, "*Evenings on a Farm Near Dikanka*" is analyzed as a myth of the right of kings, which describes the origin of the community. "*Dikanka*" consists of eight stories, all of which concern marriage. As marriage is an important factor of mythology, the variation of marriage is analyzed and we find that "*Dikanka*" is a fictional history of Ukraine that presents a fictional nationality to not only Ukrainian but also Russian readers.

Third, the narrative construction of the work is discussed from the perspective of contemporary readers and social context. "*Dikanka*" was a parody of the myth of the community, and the narrative construction reveals it as a parody of Russian readers' and Russian intellectuals' orientalism to Ukraine.

In conclusion, "*Dikanka*" has a construction that presents Ukraine as oriental fantasy. However, after Gogol, the construction was found in many literary works about Russia. This became a method used in Russian literature to describe Russia with complex identity.